

# 「開発教育ではぐくんできた心を、 その後の人生に生かしてほしい」

宮城県小牛田農林高等学校で教える石森広美さんは、授業に開発教育の視点を取り入れ、生徒たちの世界に対する興味を喚起させている。「生きる力を育てる開発教育が、自身の成長にもつながっている」と語る彼女がたどった国際理解の旅路とは。



## 「中3の秋、芋煮会で 「開けた」

高校英語教諭、日本語教師、  
フォルクロレ（南米民族音楽）  
奏者、フリーライター…。

これらはすべて「ヒロミータ」  
こと、石森広美さんの肩書きだ。  
旅が好きで、訪れた国は40カ国  
以上。そこに住む人の家を訪ね  
語り合い、集めてきたものを、  
英語や総合学習の授業に生かし



大学3年、初めての途上国ボリビアを訪ね、公園でチャランゴを奏でる石森さん。このときの旅は、その後の人生に大きな影響を与えた

ている。ここ数年は、JICA  
東北をはじめ、県内各地の学校  
などから講演の依頼が相次ぎ、  
「国際理解教育アドバイザー」と  
いう肩書きも加わった。  
開発教育について語る石森さ  
んは饒舌だ。世界や足元のさま  
ざまな事柄を生徒に伝え、共に  
考え合うことに、最大の喜びを  
感じているように見える。だが  
「中学生になるまで内向的だった  
んですよ、私」。

それまで外国人を見たこともな  
く、もちろん話をしたこともな  
かった。  
「秋保温泉近くの河原での芋煮  
会は、強烈な印象を私に残しま  
した。学校の授業やラジオ講座  
で勉強してきた英語が、通じる、  
通じる（笑）。また、好き嫌い  
ではなく、信仰の関係で豚肉を  
食べられない人がいるというこ  
ともそこで初めて知った。「たっ  
た数時間の交流でしたが、これ  
だけ心が揺さぶられた体験って  
初めてだったんです」。そのとき  
住所を交換した女性とは、十数  
年後、夫の転勤に伴って移り住  
んだシンガポールで再会し、今  
でも密な交流が続いている。

### 異文化を知る喜びに 目覚め

交流プログラムを機に、英語  
は試験のためではなく、「ミニ  
ニケーションツールだ」と実感し  
た石森さんは、高校に入ってま  
すまず英語力に磨きをかけた。  
しかし、受験勉強に重きを置く  
学校では、異文化交流のチャン  
スはまったくない。そんなとき  
目にしたのが、JICAの高校  
生エッセイコンテストのポスタ  
ーだった。東南アジアの若者た  
ちとの交流体験を書いた作文は、  
見事、審査員特別賞を受賞。副  
賞の、東京と沖縄にあるJICA  
の研修センターを訪問する研  
修旅行で、世界への目が一気に  
広がった。



2006年夏、フィジーの子どもたちと。今でも年2回は海外へ出かける

その後、筑波大学に進学、3  
年生の夏休みに短期留学した力

Ishimori Hiromi

高校英語教諭 **石森 広美**

挑戦者たち  
*Stories of*  
**Challengers**  
Vol.18



石森さんの授業は活気にあふれている。生徒の「先生の授業は国際的なことも学べて得た気分になります」という声ににっこり

ナダを皮切りに、好奇心を揺さぶる旅が始まる。石森さんにとって、初めて訪ねた途上国は南米だった。大学でフォルクローレ愛好会に所属していた彼女は、歌詞の意味を知りたくてスペイン語を独学していたのだ。

1カ月にわたるボリビアとペルーの旅は、「強烈でしたね」。フォルクローレで歌われるような鉱夫の厳しい生活を垣間見たり、おんぼろバスに乗っててこぼこ道を長時間も揺られたり。「まず、直面したのは貧しさ。でも、それ以上に、こころが満たされたんです。質素な暮らしの中に、人をもてなす温かさや家族を大切にしている気持ちがあり、

精神的に高いものを感じたんですよ。

道端や公園でアンデス地方の縦笛「ケーナ」を吹けば、周りにはすぐに人垣ができる。「私が笛を吹くと、誰かが家からチャラン（ギター）に似た10弦の民族楽器を持ってきて伴奏し、誰かが歌い、誰かが踊ってくれるんです。それがきっかけになって家に招待されたり、お祭りに連れて行ってもらったりしました。」

楽しいけれど考えさせられる旅この旅で、貧困や環境、少数民族などの問題をもっと知りたいという思いが強まり、まずは南米から勉強し始め、徐々に途上国全体に広げていった。

### 開発教育で授業に付加価値を

教員を仕事に選んだのは、世界の多様性の素晴らしさを生徒たちと共有したかったから。現在、高校で使われている英語の教科書は、欧米の話題が中心だった昔と違い、地球規模の課題や途上国のことも題材になっている。「これに開発教育を入れたら、

い手はないと、私は思っているんです。もちろん、読む・聞く・書く・話すといった、言語能力を伸ばすことが基本だが、「それ」（開発教育で）付加価値をつけられたらいいなと思っています。」

今は日本の子どもたちに英語を教える石森さんだが、アジアの若者たちに日本語を教えている時期もある。青年海外協力隊に参加しようとして、日本語教師の資格を取ったのだ。しかし、協力隊に応募する前にシンガポールで暮らすこ

とになったため、そこで中国語を学びながら、語学学校で日本語を教えた。

3年ちよつとのシンガポールの滞在中に周辺諸国を訪ね回り、現地でも産物経験、草の根の人々との交流で、ますます異文化理解を深めていった。



普段の授業でも参加型学習など開発教育の手法を取り入れ、生徒の創造力・思考力を伸ばしている。グループ活動ではほかの人の意見にも触れることができ、相互のやりとりから学びが生まれる。グループ学習は生徒たちに好評

とは勉強になるけれどつまらないと思ってしまうたら、その人の行動にはつながらないですね。世界を知ることが楽しくて素晴らしい、自分を成長させることができるということを知ってもらいたい。」

### 多様性を認め、共感する心をはぐくみたい

大きなホールの舞台上で、インドの民族衣装を着けた生徒が、英語で演技をしている。彼女らが演じるのは、貧しい農民の暮らし。舞台の袖には、教え子の演技を見守る石森さんの姿。彼女が着ているのもアジアの民族衣装だ。

これは、英語力向上を目指し



2005年の「宮城スキット甲子園」で、インドのコットン農園の場面を演じるイングリッシュクラブのメンバーたち。前年の準優勝に続き、35校中第3位を獲得

て宮城県教育委員会が毎年行っている「スキット甲子園」。演技しているのは、小牛田農林高校のイングリッシュクラブのメンバーだ。このクラブは、石森さんが同校に赴任した2003年英語や異文化に関心のある生徒たちの要望に応え、ALT（外国人の英語指導助手）とともに立ち上げた。コントのような英語劇が多いスキット甲子園で、

イングリッシュクラブは一貫して途上国を舞台にしている。04年の初出場でいきなり準優勝。その後も立て続けに入賞した。このほかに、石森さんがかつて受賞したJICAエッセイコンテストや、国際理解に関する弁論大会での入賞など、小牛田農林の生徒たちは数々の活躍を見せている。

石森さんは、「開発教育をやっている一番うれしいのは、生徒から、自分を振り返って、今まで気付かなかったことに気付く。今までの人生に反映させるヒントを得た」という感想が出てきたとき、と言った。開発教育の目的を問うと、「うん、難しいですね」と考えた後、次のような言葉が彼女の口からあふれ出た。

「自分と異なる状況にある人たちを共感的に理解して、そこから学ぶ姿勢を養うことだと思えます。民族や文化が違ってても、そこには尊い価値がある。途上国の人たちが何か問題を抱えていたら、遠い国だから関係ないんじゃないかと、共感して、すごく心が痛むかどうか、一緒に解決しようと思える心があるのかどうか。私たちと世界の国々は目に見えないところでつながり合っています。一人一人地球市民として責任のある生き方をしなければなりません。生徒には途上国を通して自分を見つめ直し、その視点をその後の人生に生かしてほしい。そこまでできず、『開発教育』だと思っただけです。」

### 「開発教育って面白い!」

石森さんや今月号の特集に登場する人々には、「開発教育」を愛する気持ちがあふれている。そして、その教育を受けた生徒たちの多くがさまざまな問題に興味を持ち、実際の行動に移している。だが、「開発教育」は、まだ一般に浸透しているわけではない。教育界においてもそれは同じだ。

学校の教員は、担当する教科別の研究会に所属する。例えば、石森さんが所属するのは、英語教育研究会と、常任幹事を務める宮城県高等学校国際教育研究会。どちらも英語圏との国際交流には熱心だが、開発教育については必ずしも関心のある人ばかりではないようだ。開発教育に特化した会への参加に、学校から補助が出るケースも少ない。だから、石森さんのように熱心な活動をしている人は、研修会の参加や教材の購入には、自分で多くを投資している。

それでも続けるのは、開発教育が「面白い」「可能性がある」から。生徒に教えるからには自身の学びも不可欠だが、それが楽しいと言いつける。

学校の先生もそのほかの人も、開発教育の現場を一度のぞいてみませんか？

開発教育は、英語や社会科だけでなく、すべての教科に取り入れることができると思う



イングリッシュクラブは、毎年、学園祭で「国際協力喫茶店」を開き、フェアトレードコーヒーなどの販売をしている。売り上げや募金などの収益は、(財)日本ユニセフ協会に寄付。喫茶店の壁には、生徒たちがフェアトレードについて調べたことが張ってある